小規模校における
より良い人間関係を築こうとする態度の育成

―― 低・中・高学年の段階に応じた学級活動指導資料
「学級活動きらりプラン」の作成と活用を通して ――

長期研修員　　原澤　ちあき

《研究の概要》

本研究では、小規模校の小学校において、児童のより良い人間関係を築こうとする態度を育成するために「学級活動きらりプラン」を作成し、学級活動において活用を図った。「学級活動きらりプラン」は、学級活動の本時の活動と事後の活動に、小規模校の課題を解決するための三つの活動を取り入れた学級活動の指導資料である。本時の活動では、「一人一人の意見を大切にする活動」と「意見のよさを大切にして公平に比べ合う活動」を、事後の活動では、「一人一人の取組を認め合う活動」を設定する。これらの活動に学年に応じて取り組んでいくことにより、小規模校においても、より良い人間関係を築こうとする態度を育成することができることを実践を通して明らかにした。

キーワード　【学級活動・ホームルーム　小学校　小規模校　人間関係　指導資料】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｇ１１－０３　平成２９年度　２６３集

Ⅰ　主題設定の理由

将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会の中で「生きる力」を育み、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、小学校学習指導要領（平成28年３月公示）が改訂された。特別活動においては、育成を目指す資質・能力として、人間関係形成、社会参画、自己実現の三つが示された。

現在、一部の地域を除き全国的に児童数の減少が進み、学校の統廃合が行われるなど、学習環境は変化の一途をたどっている。少子化・高齢化の進展は我が国の重要な課題である。文部科学省は、平成27年度の公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引において、「こうした小規模校には、個別指導が行いやすい等の利点もある一方、社会性の育成に制約が生じることや、教育指導上多くの課題が存在している」と示している。

所属校は、全校児童85名、全学年単学級の小規模校である。小規模校のよさとして、教員相互の連絡調整や連携が取りやすく、学校内の教育目標や教育活動に一貫性を持たせやすいことや、異学年の交流や縦割りの活動がしやすいことなどが挙げられる。特に所属校は、学級規模が小さいため、児童一人一人の個性や特性を把握してきめ細かな指導がしやすく、児童に活躍の場を与えやすい。その反面、クラス替えができないことから様々な人と触れ合う機会が不足してしまい、人間関係や相互の評価等が固定化されやすく、新たな人間関係が形成されにくいことが課題である。特に、中学年以降になると徐々に人間関係が固定化し、その集団の中での関わり方や役割がはっきりしてしまう傾向が見られる。このような学級における児童の立場や役割が固定化してしまう傾向は、多くの小規模校に見られる人間関係に関する課題となっていると考えられる。小規模校においては、児童が多様なものの見方や考え方を学んだり、児童自らが新しいルールや人間関係を作り上げたりする機会を意図的に作り、社会性やコミュニケーション能力を身に付けていかなくてはならないと考える。

児童が誰とでもより良い生活や人間関係を作り上げていくには、自己を表現する力（伝える力）や他者を理解し受容する力（受け止める力）、関係を調整する力（折り合う力、協力する力）が必要であると考える。これは、学校や学級の生活づくりの共通の目標を達成するために、方法や手段などを話し合って決め、役割を分担して責任を果たしながら実践する学級活動において培われていく資質・能力である。児童のより良い人間関係を築く態度を育成するためには、学級活動を通して、自他の意見を大切にし、意見のよさや根拠を大切にして公平に比べながら話し合い、集団決定したことに協力して実践するとともに、活動を振り返ることで、自他の取組のよさに気付く態度を育成することが必要である。

そこで、学級活動の本時の活動における意見を出し合う・比べ合う・決めるの過程と事後の活動において、小規模校の課題を明確にし、それを解決する手立てを研究する。本時の活動における意見を出し合う過程では、自他の意見を大切にする活動、比べ合う・決めるの過程では、意見のよさを大切にして公平に比べ合い、より良い集団決定をする活動、事後の活動では、集団決定したことに協力して実践し友達のよさを見付ける活動を取り入れ、より良い人間関係を築く態度の育成を目指す。そして、この三つの活動を取り入れた学級活動の指導資料「学級活動きらりプラン」を低・中・高学年の段階を踏まえて作成し活用を図る。これらの活用により、系統的な指導を行うことができ、小規模校における児童のより良い人間関係を築こうとする態度の育成につながると考える。以上のことから、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

学級活動において、他者の意見を理解し尊重しながら話し合い、折り合いを付け集団決定したことを協力して実践するために、「学級活動きらりプラン」を活用した話合い活動や振り返り活動を取り入れることが、小規模校におけるより良い人間関係を築こうとする態度を育むために有効であることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　「小規模校のより良い人間関係を築こうとする態度」について

小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年３月公示）では、目標に示されている「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする」について「学校や学級の生活づくりのために自己の役割や責任を果たす態度，多様な他者と互いのよさを認め合って協力する態度，規律を守る態度，人権を尊重する態度などの基礎である」と示している。

小規模校では、人間関係や相互の評価が固定化されやすく、新たな人間関係が形成されにくいことが課題である。これにより、話合い活動では、自分の意見を伝えられない児童がいたり、人間関係が集団決定に影響を与えたりすることがある。また、事後の活動では、仲の良い友達への協力や評価が多くなってしまう。

これらの課題を踏まえ、話合い活動では、一人一人の意見を大切にすること、意見のよさや根拠を大切にして公平に比べ合い、より良い集団決定をしていくことが必要であると考える。事後の活動では、集団決定したことを協力して実践することが必要であり、その姿から友達のよさに新たに気付くことができると考える。そこで、本研究の「小規模校のより良い人間関係を築こうとする態度」を「他者の意見を理解し尊重しながら話し合い、折り合いを付け集団決定したことを協力して実践しようとする態度」と捉えていく。

(2)　「低・中・高学年の段階に応じた」について

小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年３月公示）の第３章第１節学級活動、４学級活動の内容の取扱いにおいて、発達の段階に即した指導の目安が低・中・高学年ごとに示されている。また小学校学習指導要領解説国語編（平成20年３月公示）においても、「話すこと・聞くこと」の領域で話し合うことに関する指導事項を低・中・高学年ごとに示している。低・中・高学年の段階に応じたとは、これらの学習指導要領解説の指導の目安や指導事項を踏まえていくということである。

２　学級活動指導資料「学級活動きらりプラン」の概要

学級活動の指導資料「学級活動きらりプラン」は、学級活動の本時の活動と事後の活動に、小規模校の課題を解決するための三つの活動を取り入れた学級活動の指導プランである。教師用指導書、ワークシート、提示資料で構成されている。

小規模校の課題を解決するための三つの活動は、意見を出し合う過程、比べ合う・決める過程、そして事後の活動に設定している。意見を出し合う過程の活動を「ぼく・わたしがきらり」、比べる・まとめる過程の活動を「みんなできらり」、事後の活動では「学級がきらり」としている。詳細は次ページに示す。

教師用指導書は、小規模校の課題を解決するための三つの活動を取り入れた学級活動の指導例を示したものである。三つの活動を取り入れた学習の流れとそれぞれの活動のねらいと活動内容、そして指導のポイント、板書例で構成している（図１）。これを、低・中・高学年ごとに二つの題材を扱い作成した。また、小学校学習指導要領解説特別活動編、同国語科編における指導の目安や指導事項に基づいて作成した。この指導

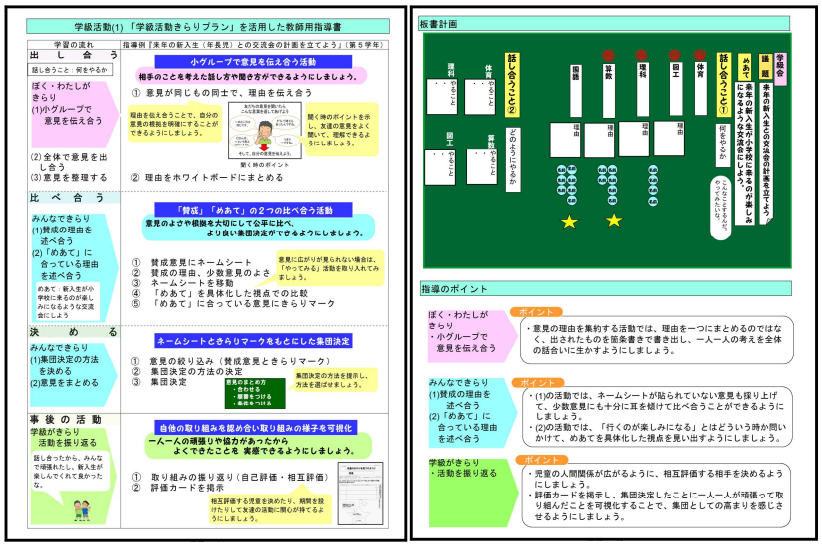


図１　教師用指導書

資料を活用することで、発達の段階に応じた指導を全職員で共通理解し系統的な指導を行うことができる。

ワークシートは、本時の活動で活用する「学級会シート」、事後の活動で活用する「振り返りシート」で構成している。「振り返りシート」は、自己評価に活用する「学級活動振り返りシート」（図２）と相互評価に活用する「友達のきらりを見つけようシート」（図３）がある。「友達のきらりを見つけようシート」では、友達の取組の様子に関心が持てるように、友達の取組のよさを記録していく形式になっている。これを活用することで、友達のよさに気付く態度を育成していくことを目指す。

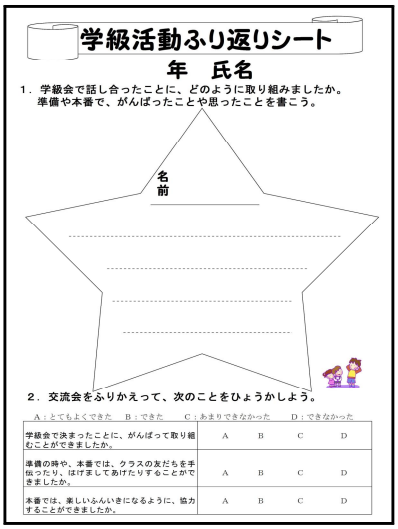


図２　学級活動振り返りシート

図３　友達のきらりを見つけようシート

提示資料の「聞くときのポイント」（図４）は、ペアや小グループで意見を伝え合う活動で活用する。兄弟姉妹のように慣れ親しんだ環境にいる小規模校の児童にとって、友達の発言に対してどのような言葉を返すとよいのかを考えずに過ごしてきている。そこで、「聞くときのポイント」を提示することで、友達の意見を聞いたら言葉を返すことの大切さを知らせ、友達の意見を大切にする態度を育成していく。「聞くときのポイント」は、低学年では相づちを打つ、中学年では共通点や相違点を考える、高学年では言い換えるなど、発達段階に応じた聞き方を示していく。

図４　中学年「聞くときのポイント」

(1)　「ぼく・わたしがきらり」について

本活動は、意見を出し合う過程で、一人一人の意見を大切にする態度を育成していくために設定する。より良い人間関係を築くためには、自己を表現する力（伝える力）や他者を理解し受容する力（受け止める力）が必要である。その基盤となるのが、相手の話を聞くことであると考える。

長谷(2013)は、「相手そのものを受け入れる」と「相手の話を理解する」という二つの要素を「受け止める」ポイントとし、相手の気持ちを大切にし、内容を理解する上で重要な要素であるとしている。さらに、この「受け止める」ポイントを段階的に指導することの重要性を示している。

山中(2017)は、「話合いでは、落ち着いて理由や根拠の是非を判断することが必要であり、感情的にならずに発言の内容を正確に理解するように努めることが大切である」と述べている。さらに、話し手に対して、聞き手が何の反応も示さなかった場合、話し手は「相手にされていない」と思ってしまうことが多いことから、応対することの必要性も述べている。

小規模校では、学級における児童の役割や立場が固定化されやすいという課題がある。これにより、自分の意見を通し過ぎてしまったり、それに遠慮してしまったりする児童が見られる。

そこで、意見を出し合う過程では、全体で意見を出し合う前に、ペアや小グループによる意見を伝え合う活動を設定する。ここでは、児童の特性を生かして、自分の意見を伝えたり意見の内容を正確に理解したりできるようにペアや小グループを意図的に編制していく。低学年では、ペアで自分の意見を伝えたり相手の意見を聞いたりすることができるように、中学年では、小グループで伝え合い自分の意見と比べながら聞くことができるように、高学年では、意見が同じ者同士で伝え合うことで自分の意見を明確にすることができるようにしていく。

⑵　「みんなできらり」について

本活動は、比べ合う・決める過程で、意見のよさや根拠を大切にして公平に比べ、より良い集団決定をするために設定する。

小規模校では、意見に広がりが見られない、人間関係が集団決定に影響を与えてしまうという課題がある。そこで、比べ合う過程では、「意見の理由」と「めあてに合っているか」という二つの比べ合う活動を設定する。

「意見の理由」を比べ合う活動では、ネームシートを活用して自分の立場を示し、意見の理由を述べ合う。立場を決めてその理由を述べ合うことは、意見のよさを考えることになり、意見を大切にすることにつながると考える。「めあてに合っているか」を比べ合う活動では、「めあて」を具体化したものを視点として与え、それに合っているかどうかで意見を比べ合う。なお、ここでは、意見に広がりが見られない場合は、「やってみる」活動を取り入れていく。意見として出されたことを実際にやって体験する活動である。実際にやってみることで、児童が感じたことを基に様々な観点から意見を述べるようになり、比べ合う活動が深まるのではないかと考える。この二つの比べ合う活動を行うことで、公平に意見を比べることができると考える。また、比べ合う活動は、発達の段階に応じて取り入れていくようにする。低学年では、「意見の理由」を比べ合う活動を中心に、中学年では二つの比べ合う活動にやってみる活動を取り入れて、高学年では、さらに少数意見の理由などを取り入れて意見に広がりを持たせ、意見のよさや根拠を基に公平に比べ合うことができるようにしていく。

この比べ合う活動を生かし、意見をまとめていく。杉田(2009)は、「折り合うこと」を段階的に指導する必要性を述べている。そして、折り合いのステップとして五つの段階を挙げている（表１）。ステップ１「いろいろな意見があることを知る」という個人の気付きで始まる段階から「話合いとは、一人でも多くの人が納得したり、一人でも多くの人の考えが生かされて答えを見つける時間」という認識を持たせ、ステップ２「集団決定の重さを理解する」、そして、ステップ３「みんなも自分もよい方法を見付ける」に進む。ここでは、みんなで知恵を合わせて異なる意見の中間を取らせたり、互いの良いところを生かして新しいものを作らせたりするなど建設的な意見が出せるようにすることが大切であると述べている。そして、中学年あたりから「どちらの意見も大切にする方法」を提示したり、高学年では「だれもが納得できる新しいものをつくっていく方法」として「条件付き賛成」などを提示したりして、「選ぶ話合い」から「練り上げる話合い」へ質的変換を図っていくことが大切であると述べている。

表１　「折り合いのステップ」杉田(2009)

ステップ１	いろいろな意見があることを知る
ステップ２	集団決定の重さを理解する
ステップ３	みんなも自分もよい方法を見付ける
ステップ４	決定には気持ちよく従う
ステップ５	心遣いをしながら活動する

そこで、比べ合う活動を生かして、賛成者が多いことやめあてに合っていることを基に意見を絞り込む。そして、低・中学年では、「合わせる」「順番を決める」などの方法を提示し、教師が支援しながら折り合いを付けて集団決定ができるようにする。高学年では、「条件付き」の方法を加えて提示し、少数派の意見に耳を傾けながらより良い集団決定ができるようにする。

⑶　「学級がきらり」について

本活動は、事後の活動において、集団決定したことに協力したり、友達のよさに気付いたりする態度を育むために設定する。

小規模校では、児童相互の評価が固定化されやすく、友達のよさについても、特定の児童についての評価が多くなってしまう。そこで、事後の活動では、小規模校のよさを生かして、一人一人に役割を与え、それを認め合う活動を設定していく。認め合う活動では、評価する児童を決めて、全員の児童の取組を認め合うことができるようにしていく。また、評価する児童については、関わりが少ない児童を組み合わせるなど、児童の人間関係を踏まえて教師が意図的に相手を決めていく。そして、相互評価カードを活用し、友達の頑張りを記述することで、友達のよさに気付くことができるようにする。自己評価カードでは、集団決定したことに対しての取組の様子を振り返ることで、集団決定したことに協力して実践できたということを実感させていく。さらに、これらの評価カードと取組の様子

の写真などを併せて提示し、一人一人の頑張りや協力があったから成功したことを可視化することで、協力することの大切さや学級の高まりを実感できるようにする。また、低学年では、集団決定したことをみんなで実践するよさを実感できるように、話合いで決まったことをすぐに実践する。そのために、１単位時間の中で、前半で話合いを行い、後半で決めたことを実践していくようにする。

３　研究構想図

Ⅳ　研究の計画と方法

1　授業実践の概要

対象	小学校第１学年	小学校第２学年	小学校第３学年	小学校第４学年	小学校第５学年	
期間	平成29年８月30日～ 平成29年11月30日					
実践活動	「うんどうかいをがんばろう」	「なかよしの会の計画を立てよう」	「低学年のリーダーとして運動会に取り組もう」	「楽しいバス旅行にしよう」	「サブリーダーとして運動会に取り組もう」	「来年の新入生との交流会の計画を立てよう」
授業者	担任	担任	長期研修員	長期研修員	長期研修員	担任

2　検証計画

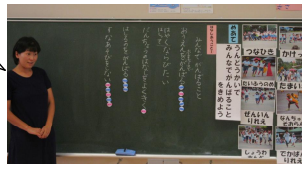
検証項目	検証の視点	検証の方法
見通し１	意見を出し合う過程において、「学級活動きらりプラン」における「ぼく・わたしがきらり」を活用したことは、自他の意見を大切にする態度を育むために有効であったか。	・活動の様子の観察・記録の分析 ・児童の活動の振り返り（自己評価カード、相互評価カード）の分析 ・ワークシートの記述の分析 ・学級活動に関するアンケート調査（自作）の分析 ・教職員への聞き取り
見通し２	比べ合う・決める過程において「学級活動きらりプラン」における「みんなできらり」を活用したことは、意見のよさや根拠を大切にして公平に比べ合い、より良い集団決定をするために有効であったか。	
見通し３	事後の活動において「学級活動きらりプラン」における「学級がきらり」を活用したことは、集団決定したことに協力して実践しようとする態度を育むために有効であったか。	

1　授業実践

(1)　小学校１年生　議題「うんどうかいをがんばろう」

＜ねらい＞　運動会でみんなで頑張ることを話し合うことができる。

過程	「学級活動きらりプラン」を活用した本時の活動の様子	教師の気付き
出し合う	**○ ペアによる意見を伝え合う活動** ・意見の伝え合いの方法を確認する。 自分が意見を言った後、お友達が黙っていたら、どう思いますか？ お友達の意見を聞いたら、「いいですね」や「同じです」という言葉を言ってあげましょう。 ・ペアで意見を伝え合う。 ＜児童の意見＞ ・応援を頑張る ・早く並ぶ ・団長の話をよく聞く ・砂遊びをしない ぼくは、応援を頑張りたいです。 いいですね。私は、砂遊びをしないようにしたいです。	・自分が意見を言った時、相手が無反応だったらどんな気持ちになるかを問い掛けることで、言葉を返すことの大切さを知らせることができた。 ・ペアでの活動を通して、自分の意見を伝えたり相手の意見をじっくり聞いたりすることができた。 ・全体で意見を出し合う活動では、似ている意見は、すでに出されている意見に付け足す形で板書していくことで意見を整理することができた。
比べ	**○全体で「意見の理由」の視点で意見を比べ合う活動** ・賛成意見にネームシートを貼り、その理由を述べ合う。	・「どうしてこの意見がいいと思ったの？」などと問い

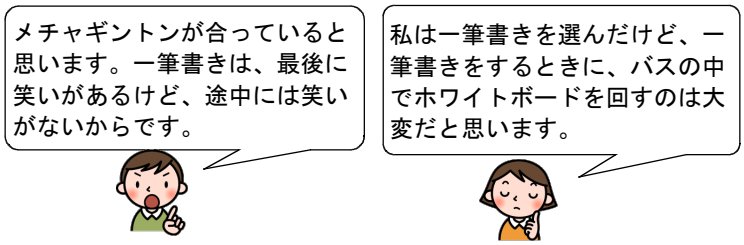
合う	＜賛成の理由＞ ・応援してもらうと元気が出てくるからです。 ・砂遊びをしないと、話がよく聞けるからです。	掛けることで、意見の理由を明らかにすることができた。
決める	**○全体で集団決定する活動** ・集団決定する意図を伝え、方法を提示して集団決定する。 一番大切なことを一つ決めて、みんなで一緒に頑張りましょう。ネームシートがたくさん付いている意見が二つあるから、くっつけていいですか？  ＜決まったこと＞砂遊びをしないで応援を頑張る。	・1 年生の初期の段階では、意見をまとめる意図を伝え集団決定を行うことが大切であると感じた。
	○決まったことの実践 ・集団決定したことをやってみる。 先生、団で応援の練習をやっていいですか？ ４・５・６年生が運動会の練習をやってるよ。みんなで応援しよう！ 	・やってみることで、活動を工夫したり、全員で声を合わせて楽しそうに応援したりしている様子が見られた。集団決定したこと理解し、みんなで実践する楽しさを感じているようだった。
考察	・ペアで意見を伝え合う活動を設定することで、一人一人が自分の意見を伝えたり、相手の意見をよく聞いたりすることができた。しかし、多くの児童が「いいですね」と言葉を返していることから、相手の意見に応じて、言葉を選んで話せるように活動を積み重ねていく必要がある。 ・低学年では、「どうしてそう思ったの」などと問い掛け、意見の根拠を明らかにすることが大切である。教師が問い掛け、それに児童が答える対話の中で、意見の共通点や相違点などを明確にすることができる。 ・賛成意見を選ぶ活動では、根拠を基に自分の考えを持つことができるように、意見の理由を板書して残しておき、それを読んで確認するなどの支援が必要である。 ・決まったことをやってみるという活動では、活動に意欲的に取り組んだり工夫したりする様子が見られた。このことから、この活動を取り入れたことは、集団決定したことの意味を理解したり協力することの楽しさに気付く上で効果的であったと考える。	

(2)　**小学校４年生　議題「楽しい旅行にしよう」**

＜ねらい＞　バスの中のレクリエーションを話し合って決めることができる。

過程	「学級活動きらりプラン」を活用した本時の活動の様子	教師の気付き
出し合う	**○ グループによる意見を伝え合う活動** ・意見が同じ者同士でグループを編制し、理由を伝え合う。 ぼくは、メチャギントンがいいです。理由は楽しいからです。 私も同じ理由で、みんなでやると楽しそうだからです。 ＜児童の意見＞ ・メチャギントン（みんなでやると楽しそうだからです。） ・クイズ（まちがっても罰ゲームがないからです。） ・カラオケ（盛り上がるからです。） ・一筆書き（どんな絵になるのかおもしろそうだからです。）	・同じ意見の児童でグループを編制して理由を伝え合うことにより、発言が控え目めな児童も、自分の意見と理由を伝えることができた。 ・友達の意見を聞いて「同じ」「違う」などの言葉を使って自分の意見を伝える児童が多く見られた。
比べ	**○全体で「意見の理由」の視点で意見を比べ合う活動** ・賛成意見にネームシートを貼り、その理由を述べ合う。	・意見の理由をホワイトボードに書き出しておいたこと

<table>
<tr><td>合う</td><td>＜賛成の理由＞
・クイズ（待ち時間がないからです。）
・一筆書き（何ができるか楽しみだからです。）
＜少数意見のよさ＞
・カラオケ（みんなで歌うところがいいと思います。）

意見と賛成者の数
<table><tr><th>意見</th><th>賛成の理由を述べ合う前</th><th>賛成の理由を述べ合う後</th></tr><tr><td>クイズ</td><td>５人</td><td>４人</td></tr><tr><td>一筆書き</td><td>４人</td><td>１人</td></tr><tr><td>カラオケ</td><td>０人</td><td>３人</td></tr><tr><td>メチャギントン</td><td>０人</td><td>１人</td></tr></table></td><td>で、それを根拠に賛成の理由を述べていた。
・賛成者がいなかった意見を選んだ児童がいたことから少数意見にも耳を傾け、意見のよさを考えながら聞くことかできた。</td></tr>
<tr><td></td><td>○全体で「めあて」を視点に意見を比べ合う活動
・めあてを具体化した視点「みんなが楽しめる」に合っているかについて、一筆書きとメチャギントンをやってみて比べる。
＜めあてに合っていると思う意見と理由＞
・メチャギントン１人、一筆書き８人
メチャギントンと一筆書きをやってみる。
 

・ メチャギントン９人、 一筆書き０人</td><td>・実際にやってみることで、体験を生かした比べ合う活動ができた。
・少数意見の理由を問うことで、めあての「みんなが楽しめる」に必要な笑いの量や、運営面についての意見が出され、比べ合う活動が深まった。
・少数派の意見を大切にしながら、折り合いを付けて集団決定を行うことができた。</td></tr>
<tr><td>決める</td><td>○全体で集団決定する活動
・ネームシートが多く貼られているものと、めあてに合っているものを基に意見をまとめる。
＜決まったこと＞クイズ、カラオケ、メチャギントン</td><td>・比べ合う活動が十分に行われたことで意見が絞り込まれ、スムーズに集団決定をすることができた。</td></tr>
<tr><td>考察</td><td colspan="2">・小グループで意見を伝え合う活動では、発言が控え目な児童も自分の考えを伝えていた。また、新たな理由を考えた児童も見られた。活動の自己評価では、「友達の意見を自分と同じところや違うところを比べながら聞くことができた」と78％の児童が回答している。これらのことから、同じ意見で小グループを編制したことや、聞くときのポイントを活用して活動を支援したことは、自分の意見を伝えたり、友達の意見を理解したりする上で効果的であったと考える。
・「やってみる」活動を設定したことで、笑いの量や運営面についての意見が出された。このことから、「やってみる」活動は、意見を公平に比べ合う上で、効果的であったと考える。
・少数意見の理由を出し合うことで、少数意見の賛成者が増えた。このことから、少数意見も大切にして意見を比べることができたと考える。
・集団決定がスムーズに行われたことは、少数派の意見も含め、十分に意見を出し合う中で比べ合う活動が行われたためと考える。また、その中で、「賛成者が多く、めあてに合っている意見」という意見の絞り込みの基準を示したことが効果的であったと考える。</td></tr>
</table>

(3)　**小学校５年生　議題「来年の新入生との交流会の計画を立てよう」**

＜ねらい＞　交流会の授業ごっこの教科や内容を決めることができる。

<table>
<tr><th>過程</th><th>「学級活動きらりプラン」を活用した本時の活動の様子</th><th>教師の気付き</th></tr>
<tr><td>出し合う</td><td>○ グループによる意見を伝え合う活動
・意見が同じ者同士でグループを編制し、理由を集約する。
＜児童の意見＞
・英語（保育園では、あまりやらないからです。）
・国語（一年生で最初にやる勉強だし、漢字っておもしろいと思うからです。）</td><td>・聞くときのポイントを活用し「同じ」「違う」を視点にして友達の意見を聞いていた児童が多く見られた。
・多くのグループが、それぞれの意見の理由の良いところを</td></tr>
</table>

・算数（問題を解いた時のうれしさを感じることができるからです。）
・図工（物を作る楽しさを感じることができるからです。）
・総合（ パソコンの使い方を教えてあげられるからです。）

選んでまとめていた。まとめることに時間がかかってしまったので、それぞれの理由を書き出す活動でもよかったのではないかと思う。
・意見の理由以外のことを話し合っていた様子が見られたことから、活動内容を明確に提示する必要があると感じた。

比べ合う

○全体で「意見の理由」の視点で意見を比べ合う活動
・賛成意見にネームシートを貼り、その理由を述べ合う。
＜意見の理由＞
・算数（１年生がすぐやる教科だからです。）
・理科（実験をやると、「やってみたいな」と思うからです。）
＜少数意見のよいところ＞
・図工（折り紙なら保育園生でもできると思います。）
・総合（キーボードの使い方を１年生の時から覚えておけば、役立つと思います。）

意見と賛成者の数

意見	賛成の理由を述べ合う前	賛成の理由を述べ合う後
理科	９人	４人
算数	６人	８人
国語	２人	０人
図工	０人	４人
総合	０人	０人
英語	０人	１人

・賛成意見が変わった児童は　ネームシートを移動させる。

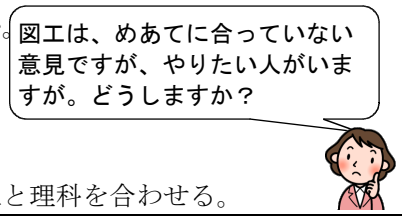
○全体で「めあて」を視点に意見を比べ合う活動
・めあてを具体化した視点「すごいな、やってみたいなと思う教科」に合っているかについて意見を述べ合う。
＜児童の意見＞
・理科（道具を使って実験をやっているので、それを見せたり体験させたりするとすごいと思うと思います。）
・算数（１年生でやる教科を優先するといいと思います。）
・図工（保育園では、先生に手伝ってもらっていたけど、小学校では自分でやるということを知らせるとすごいと思うと思います。）
＜めあてに合っている意見＞算数と理科

・意見の理由をホワイトボードに書き出しておいたことで、それを根拠に意見の理由を述べていた児童が多かった。
・ネームシートが貼られていない意見のよさを問い掛けることで、少数派の意見のよさを考えることができた。
・賛成意見が変わった児童の中で、少数意見を選んだ児童が見られたことから、少数意見にも耳を傾け、意見のよさを考えながら聞くことかできたと考える。

・「めあて」を具体化した視点を与えたことにより、保育園にない小学校のよさや、年長児の気持ちを考えた意見を述べることができた。

決める

○全体で集団決定する活動
・ネームシートが多く貼られているものと、めあてに合っているものを基に意見を絞り込む。
・集団決定の方法を決める。
・集団決定する。



＜決まったこと＞　算数、図工と理科を合わせる。

・少数意見に目を向けさせる問い掛けをすることで、より良い集団決定につなげることができた。

考察	・小グループで意見を伝え合う活動では、意見の集約に時間がかかってしまったことから、活動の目的や意見の集約の仕方などを明確にして行う必要がある。 ・比べ合う活動では、賛成意見が変わった児童がいたことや、活動後の自己評価で「友達の意見を自分の意見に役立てることができた」と回答している児童が83%であったことから、意見のよさや根拠を大切にして意見を比べることができたのではないかと考える。 ・比べ合う活動では、小学校のよさや年長児の気持ちを考えた意見が出されたことから、「めあて」を具体化した視点を与えたことは、多様な観点から意見を出し合う上で効果的であったと考える。 ・活動後の自己評価で「意見のまとめ方に納得できた」と全員の児童が回答したことから、みんなできらりの活動を行うことや少数意見に目を向けさせる問い掛けを行うことは、より良い集団決定をするために有効であったと考える。

(4)　小学校５年生　「来年の新入生との交流会の計画を立てよう」の事後の活動

過程	「学級活動きらりプラン」を活用した事後の活動の様子	教師の気付き
事後の活動	**○交流会を行う。** 授業ごっこ「理科」 授業ごっこ「図工」 **○活動を振り返る。** ・評価カードに自分や友達の頑張りについて記述する。 ＜自己評価カードの記述＞ **準備の時は、絵の具を貸してくれる人を探したり、シナリオを考えたりすることを頑張りました。本番では、時間がかかってしまったけど、手伝ってくれた人がいたので助かりました。** ＜相互評価カードの記述＞ **Ｙくんは、準備の時にＴ君と何度も顕微鏡を確認していたのですごいなと思いました。本番で、よくできていたのでいいなと思いました。**	・一人一人が役割を持ち、年長児を楽しませようと工夫しながら活動していた。 ・自分の仕事だけでなく、友達の仕事を手伝う姿が見られ、協力して活動していた。 ・自己評価カードには、友達に協力してもらってありがたかったことを記述している児童も見られた。 ・相互評価カードには、普段関わりの少ない児童の地道な取組についての記述が見られた。
考察	・評価する児童を決めて継続的に相互評価を行い、友達の活動に関心を持つことかできるようにしたことは、友達のよさに新たに気付かせる上で効果的であったと考える。 ・事後の活動の自己評価では、学級会をやってよかったと回答している児童が100%であった。このことから、折り合いをつけて集団決定したこを協力して実践することの大切さを実感することができたのではないかと考える。	

Ⅴ　研究の結果と考察

１　「ぼく・わたしがきらり」の活動の有効性について

(1)　児童の自己評価より

５年生の11月の児童の話合い活動の自己評価では、「自分の考えを伝えることができた」という項目で「よくできた」と回答した児童が、９月の学級活動より約２倍に増加した。また、「友達の意見を大切に話し合うことができた」と全員の児童が回答している（次ページ図５）。

このことから、「ぼく・わたしがきらり」を活用し、小グループで意見を伝え合う活動を行うことで、一人一人が自分の考えを伝えることができたと考える。また、「聞くときのポイント」を活用し、友達の意見を聞いたら言葉を返すという活動を行うことで、友達の意見をよく聞くことや大切にしようという意識を高めることができたと考える。

(2)　教職員からの意見より

ペアや小グループで意見を伝え合う活動について、低学年や中学年の教職員からは、「一人一人が安心して意見を伝える場が確保されていて良かった」という意見があった。また、「低学年では、小グループよりペアが効果的である」という意見もあった（図６）。これらのことから、ペアや小グループで伝え合う場を設定し「聞くときのポイント」を示して活動を支援することで、児童が安心して自分の意見を伝えることができたと考える。

高学年の教職員からは、同じ意見でグループを編制し理由を伝え合う活動について、「自分の考えを明確にすることができた」、「話し合うことで、自分の考えを深めることができた」という意見があった（図６）。これらのことから、理由を伝え合う活動は、自分との違いやよさを見付けることにつながり、自分の考えを明確にする上で効果的であったと考える。

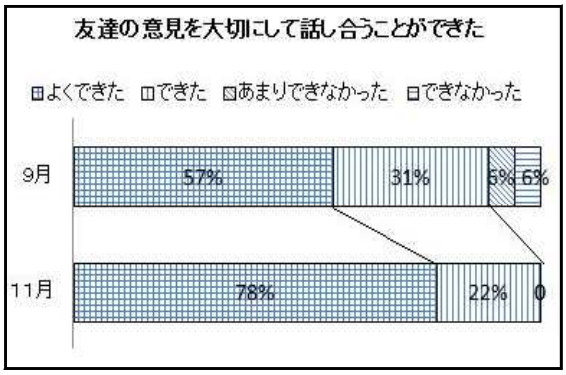


図５　話合い活動の自己評価（５年生）

・聞くときのポイントで、意見を聞いたら返す言葉の例を示したことで、児童が不安にならなかったので良かった。
・全体の場で意見を出せない児童や消極的な児童に、グループでの伝え合いは有効であったと思う。２年生の場合、教師がグループに入り支援したことで、伝え合いの方向が明確になった。
・同じ意見の者同士でグループを編制することで、自分の考えをより明確にしたり確認したりすることができ、グループで伝え合うことでより深めることができたと思う。

図６　教職員からの意見

２　「みんなできらり」の活動の有効性について

(1)　児童の自己評価より

意見の理由を比べ合う活動において、５年生の11月の話合い活動の自己評価では、「友達の意見を自分の意見に役立てることができた」と全員の児童が回答した（図７）。ワークシートの感想にも、「○○君の意見が良かった」「みんながいろいろな意見を言えていたのですごいと思った」など友達の意見のよさについて記述している児童が、９月では、27%だったが、11月では、50%に増加している。

めあてを視点に比べ合う活動では、「話合いのめあてを考えて話し合うことができた」と回答した児童が約50%増加した（図８）。授業実践においても、めあてを具体化した視点を提示することで、様々な観点から意見を述べ合い比べることができた。

これらのことから、「みんなできらり」を活用し、意見の理由とめあてを視点に意見を比べ合う活動を行うことで、意見のよさや根拠を大切にして意見を公平に比べることができたと考える。

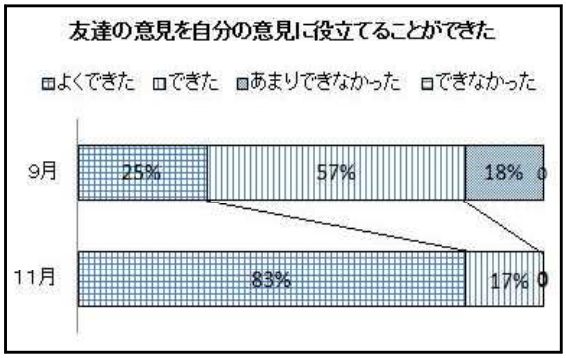


図７　話合い活動の自己評価（５年生）

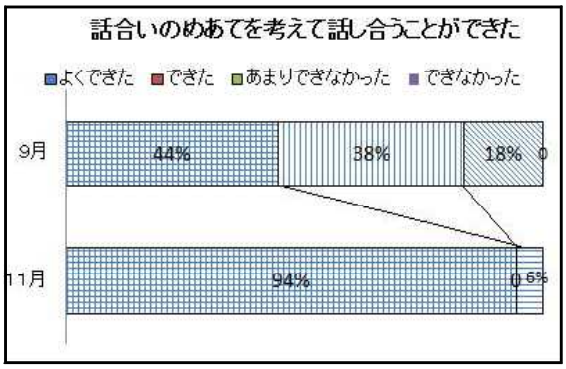


図８　話合い活動の自己評価（５年生）

(2)　教職員からの意見より

低学年の教職員からは、賛成意見にネームシートを貼る活動について、「自分の考えを決めたり、友達の意見を知ったりする上で効果的である」、「一人一人の意見を大切にしながら集団決定する活動になっている」という意見があった(図９)。また、「低学年では、自分の意見が通らないと不機嫌になってしまい、友達の意見の良いところに着目することが難しい。継続的な取組が必要」という意見もあった。

中・高学年の教職員からは、めあてを具体化した視点を与えることで、「拡散した意見が絞り込まれ、集団決定に役立つ」という意見があった（図９)。

これらのことから、「みんなできらり」を活用した活動は、他者の意見のよさや根拠を考えて意見を公平に比べ、集団決定に向けて意見を絞り込む上で効果的であると考える。

・ネームシートやきらりマークを活用したことにより、自分の意思決定を明確にし、一人一人の意見を大切にしながら集団決定する活動になった。
・ネームシートは使いやすく、視覚的にも良かった。意見の下に貼ることで、自分の意見を取り入れてもらえた満足感がある。
・ネームシートやきらりマークを活用することで、根拠を持って意見を絞り込みやすくなった。めあてを具体化したものをうまく示していくことで、ぶれない話合いになる。
・めあてを具体化したことで、活動が焦点化した。

図９　教職員からの意見

３　「学級がきらり」の活動の有効性について

(1)　児童の自己評価より

５年生の11月の学級活動での自己評価では、「学級会で決まったことに頑張って取り組むことができた」、「学級会で交流会のことを話し合って良かったと思う」と回答した児童が共に100%であった。また、11月の学級活動についてのアンケート調査においても、全員の児童が「クラスのために頑張りたい」と回答している（図10)。このことから、「学級がきらり」を活用し、自分の頑張りを他者から認めてもらうことで、集団決定したことに協力して取り組むことの大切さに気付くことができたのではないかと考える。この気付きが次の活動への意欲になり、クラスのために頑張りたいという意識につながったのではないかと考える。

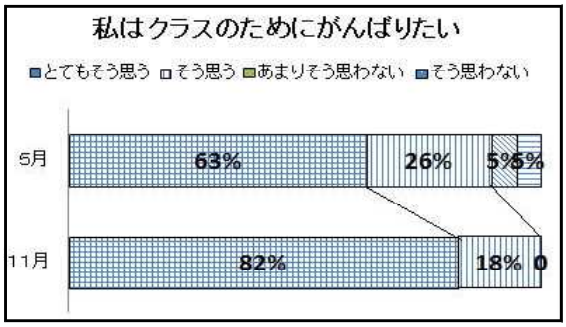


図10　学級活動についてのアンケート（５年生）

「友達を手伝ったり励ましてあげたりした」については、よくできたと回答した児童が９月から50%増加している（図11)。これは、認め合う活動で、相手を決めて相互評価したことで、その相手に関心を持つようになり、声を掛けたり手伝ったりすることができたのではないかと考える。

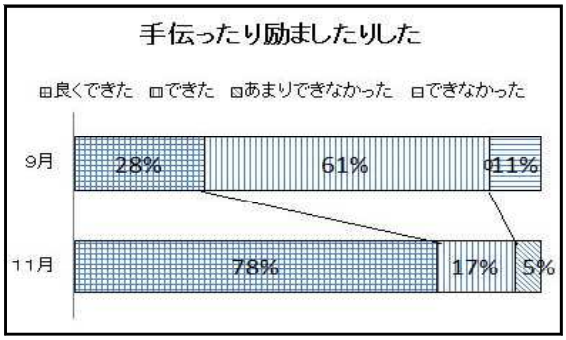


図11　話合い活動の自己評価（５年生）

これらのことから、小規模校では、児童相互の評価や立場や役割が固定化されていて新たな人間関係が形成されにくいという課題があるが、「学級がきらり」の活動を取り入れることで、集団決定したことに協力して取り組んだり友達のよさに気付いたりする態度の育成につなげることができたと考える。

(2)　教職員からの意見より

低学年の教職員からは、「集団決定したことが実践

・集団決定したことを「やってみる」というのは、どうしたらいいか不安だったが、集団決定したことがうまくいくように、子どもたちと考えながら実施することができた。
・取組が可視化されたことで、達成感を得たり、それが次の活動への意欲になったりした。
・下学年や上学年に評価してもらうことで、より充実感を味わうことができた。
・相手を決めて相互評価したことにより、相手の目立たない取組に気付くことができた。友達の新たなよさを感じることができた。

図12　教職員からの意見

の場で忠実に守られている」という感想があった。このことは、「やってみる」という活動を通して、集団決定したことの意義を体感し協力することの楽しさを味わい、事後の活動に意欲的に取り組むことができたのではないかと考える。

中・高学年の教職員からは、「相互評価では、児童が迷うことなく評価カードを書いていた」、「友達の新たなよさを感じることができた」という意見を得た（前ページ図12)。このことから、評価する相手を決めて継続的に評価活動を行ったことは、普段関わりの少ない友達のよさに気付かせるために効果的であったと考える。また、評価カードを掲示する活動については、「取組が可視化されたことにより達成感を得たり、次の活動への意欲を高めたりすることができた」という意見を得た（前ページ図12)。これらのことから、「学級がきらり」を活用し、一人一人に活躍の場を与え互いの取組を認め合う活動を取り入れたことは、集団決定したことに協力することの大切さを実感し、次の活動への意欲を高めるために効果的であったと考える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

○　小規模校では、児童の立場や役割が固定化されやすいことが課題であるが、「ぼく・わたしがきらり」の意見を出し合う活動を行い「聞くときのポイント」を活用したことで、自分の意見をしっかり伝えたり、友達の意見をよく聞いたりして、自他の意見を大切にして話し合うことができた。

○　小規模校では、意見に広がりが見られないことや、公正に比べることが難しいことが課題であるが、「みんなできらり」の比べ合う・決めるの活動を行ったことで、多様な観点から意見を述べ合い、友達の意見のよさや根拠を基に公正に比べることができた。

○　小規模校では、児童相互の評価や人間関係が固定化されやすいことが課題であるが、「学級がきらり」の振り返りの活動を行ったことで、集団決定したことに協力して取り組んだり友達のよさに新たに気付いたりして、より良い人間関係を築こうとする態度の育成につなげることができた。

２　課題

本研究では、「意見の理由」や「めあて」を視点にして意見を比べ合う活動を設定し、意見のよさや根拠を基に公平に比べ合うことができるようにした。小規模校の課題である意見に広がりを持たせることや、公平に意見を比べ合うためには、反対意見を扱う活動を研究していく必要がある。

Ⅶ　提言

一人一人に活躍の場を与えられることができるのは、小規模校の最大のよさである。これを生かして「学級活動きらりプラン」における一人一人の意見を大切にして、意見のよさを比べ合う活動や、一人一人の頑張りを認め合う活動を積み上げて行くことで、小規模校においてもより良い人間関係を育んでいくことができると考える。

＜参考文献＞
・文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター　著
『楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動』　文溪堂(2014)
・杉田　洋　著　『よりよい人間関係を築く特別活動』　図書文化(2009)
・山中　伸行　著　『話し合いができるクラスのつくり方』　明治図書(2017)
・長谷　浩也　著　『対話が子どもの学びを変える指導のアイディア＆授業プラン』　明治図書（2013）

＜担当指導主事＞
小熊　良一　　根岸　真早子